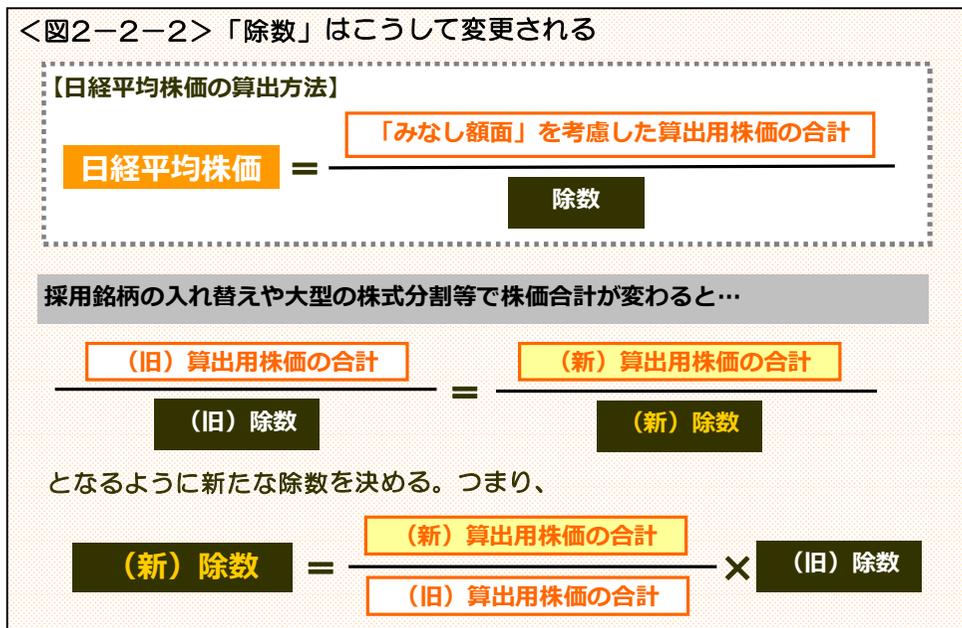


本気の<株>再入門、より サンプル



みなし額面から計算した掛け目と除数は、日本経済新聞社のサイトで公表されています。ですから、225 銘柄の時価を入手すれば、誰でもいつでも日経平均株価を算出することができます。この透明度の高さ、わかりやすさが、日経平均株価の大きな特徴といえます。

◆◆◆ 指数算出用の株価が高いほど「寄与度」が大きい

「225 銘柄の指数採用株価の合計÷除数」で算出される日経平均株価には、指数算出用の株価の高い銘柄ほど、指数の値に寄与する度合いが大きくなるという性格があります。このところ、先物主導の動きが露骨になっていることと関係があると思われませんが、各銘柄の日経平均株価に対する寄与度が注目される機会が多くなっています。

たとえば、13年10月25日の日経平均株価の引値は、前日比398.22円安の1万4088.19円。225銘柄の中で最も指数算出用の株価が高いファーストリテイリング(9983)のこの日の引値は、前日比1150円安の3万2150円。このファーストリテイリングの引値を除数25.48で割った「1261.77円」が、この日の日経平均株価に対して、ファーストリテイリングの株価が寄与した額です。この1261.77円を日経平均株

本気の<株>再入門、より サンプル

価 1 万 4088.19 円で割った比率「8.96%」が、日経平均株価に対する寄与度を示します。

また、前日比の「マイナス 1150 円」を除数 25.48 で割った「45.13 円」は、この日の日経平均株価の前日比「マイナス 398.22 円」のうち、ファーストリテイリングの値下がりによるマイナス分を意味します。

ファーストリテイリングに次いで寄与度が高い銘柄は「掛け目 3」のソフトバンク (9984) です。この日の株価は 7400 円だったので、指数算出に用いられる株価はその 3 倍の 2 万 2200 円。この日の日経平均株価 1 万 4088.19 円のうち、「2 万 2200 円 ÷ 除数 25.48 = 871.27 円」がソフトバンクの日経平均株価に対する寄与価格。「871.27 ÷ 1 万 4088.19 円」の 6.18%がこの銘柄の寄与度です。

指数算出用の株価の高い順に各銘柄の寄与度を足し込んでいくと、上位 30 銘柄で 50%を超えます。つまり、上位 30 銘柄で、日経平均株価の値の半分は説明できるということです。

上位 100 銘柄となると、寄与度合計は 85%超。225 銘柄で算出されている指数ではありますが、その半分以下の銘柄数で日経平均株価の大方が決まっていることになります。

<図2-2-3①>日経平均株価に対する各銘柄の寄与価格・寄与度の計算方法

採用225銘柄の各採用株価に $n_1, n_2, n_3, \dots, n_{225}$ と番号を付けたとすると、日経平均株価は

$$\text{日経平均株価 } N = \frac{n_1 + n_2 + n_3 + \dots + n_{225}}{\text{除数}}$$

- 株価 n_1 の銘柄の日経平均株価に対する寄与価格

$$n_1 \text{の寄与価格} = \frac{\text{(算出用株価) } n_1}{\text{除数}}$$

- 日経平均株価に対する寄与度

$$n_1 \text{銘柄の寄与度} = \frac{n_1 \text{の寄与価格}}{\text{日経平均株価 } N}$$

除数25.48の場合、個別銘柄の株価3万円の寄与価格は、

$$\frac{3 \text{万円}}{25.48} = 1053.37 \text{円}$$

日経平均株価が1万4000円ならば、寄与度 (%) は、

$$\frac{1053.37 \text{円}}{1 \text{万}4000 \text{円}} = 7.52\%$$

2-3

各銘柄が指数に与える影響 指数から受ける影響

◆◆◆ファーストリテイリングが問題視された理由

日経平均株価の値動きに与える影響度は、各銘柄の寄与度の高さとともに、値動きの大きさによって決まります。言うまでもなく、寄与度の高い銘柄が大きく動けば、日経平均株価の値動きに対するインパクトも大です。

先述の通り、10月25日のファストリの「前日比マイナス1150円」は、日経平均株価の「前日比マイナス398.22円」のうち、マイナス45.13円分を占めます。ファストリの引値の日経平均株価に対する寄与度は8.96%ですが、この日の値動きは、日経平均株価の値動きに「 $45.13 \text{円} \div 398.22 \text{円} = 11.33\%$ 」ものインパクトを与えたということです。

この銘柄は寄与度がトップであることもさることながら、日々の値動きの大きさも注目すべき点といえます。比較的値動きの大きい銘柄が多い小売セクターの中であって、この銘柄の1日あたりのボラティリティーは約3%。住友不動産やオリンパスといった銘柄と同水準の高さです。

寄与度が高く、値動きも大きいとなれば、日経平均先物に日経平均株価をすり寄せたいときに使われやすくなる可能性は否定できません。何しろ、この銘柄の「このくらいの値動きは想定内」であるプラスマイナス3%に相当する1000円程度の値動きは、日経平均株価を約40円上下させるインパクトを持つのです。この銘柄が2000円も動くものなら、日経平均株価に与えるインパクトは約80円です。